

顔面骨への手術アプローチ

Edward Ellis III, Michael F. Zide 原著 下郷和雄 監訳

『Surgical Approaches to the Facial Skeleton』は、1995年の初版刊行以来、米国で頭蓋顎顔面外科を修める医師にとって教科書的な本となっている。本書は、その第3版（Wolters Kluwer, 2018）の日本語版である。本書の特徴は、解剖学に加え技術的要素を詳細に解説し、手術アプローチ法に特化している点である。きれいな良い手術は的確なアプローチから成り立つものであり、1つのアプローチ法しか知らないと対処できる部位は狭められ無理をした手術となってしまう。例えば耳鼻咽喉科医である私は、眼窩底骨折へのアプローチは内視鏡による経鼻内法もしくは経上顎洞法が主であった。しかし本書第2部に記載されている経眼窩法を行うと、驚くほど眼窩底骨折前方の処置が簡単であった。眼窩底後方の骨折に対しては内視鏡下経鼻内法のほうが処置しやすいが、前方に対しては経眼窩法のほうが格段に容易である。病変部位によってアプローチ法を変えることの重要性が実感できる。

顔面骨格の手術においては、切開する際に顔の審美性、表情筋とその神経支配、感覚神経の走行を考慮しなければならない。そのため病変部位に対するアプローチ法は、引き出しが多いほうが良い。その点、本書はそれぞれの長所と短所を列挙し、ある特定のアプローチ法を推奨しているわけではない。各アプローチ法の長所と短所を理解した上で選択できれば、対処できる部位の幅が広がり、治癒率の向上につながる。そのため本書を頭蓋顎顔面領域の手術に携わるすべて

の外科医にお薦めする。本書を読めば、顔面骨格のあらゆる箇所に自信を持ってアプローチできるようになり、外科医としてランクアップするであろう。

さらに私は、本書を中堅以上の耳鼻咽喉科医にお薦めしたい。われわれ耳鼻咽喉科医は、鼻閉に対する手術として鼻中隔中央部を切除する術式を伝統的に施行してきた。そして外鼻形成術は鼻閉と関係のない話であり、形成外科医の役割と考えていた。しかし鼻という1つの器官は必要な鼻機能が外鼻形態を形成しており、鼻の手術を行う際には、機能的手術と形態的手術の両方をバランス良く治療することが望まれる。鼻外アプローチ（第7部）の手術手技が求められるようになり、現在では実際に施行する耳鼻咽喉科医も増えている。本書は、鼻外アプローチの手術手技に対しても解剖を基本に置いた上で、豊富なイラストと写真を使用し、丁寧に手術手技の手順を解説している。本書を理解することで鼻閉に対する手術の合併症を限りなく減らし、満足度の高い治療を行えるようになるであろう。間違いなく今後の外科医人生に役立つ良書であり、ぜひ読破することをお薦めする。

東歯大市川総合病院准教授・耳鼻咽喉科
飯村慈朗

A4・頁272 2019年10月
定価：本体20,000円＋税
[ISBN978-4-260-03951-2] 医学書院刊